

寒梅のふるさと

竹 中 正 夫

ささやかな出立

一八八五年一月二十九日、同志社はささやかな出立をした。そしてその翌年の一月末から一二月にかけて、一週間おきに同志社につらなる三つの教会が結成された。これが今日の同志社教会の母体である。毎年このころになると同志社では、創立記念の行事が行われている。年々歳々そのために多彩な催しとなされているが、同志社設立当初の状況におもいをはせて、創立者たちの精神をあらたにしたいとおもつ。

同志社の出立の仮校舎は、寺町丸太町を少しあがったところ（松蔭町一八番地）、今の日本家屋であつた。そこは新島が高松保実か

ら借りたもので、家賃一四円という値段は、当時としては、非常に高いものであつた。当初は月六円を納めていたものが、新島が耶蘇教徒であり、耶蘇の学校をつくるというので貸すことを渋った家主に無理をいって借りた事情を反映していた。

同志社開校当時の社員（現在の理事者）は、新島襄と山本覚馬の二人、それにアメリカン・ボードの宣教師ジェローム・デイヴィスが教師としていたが、彼は外国人であるため社員ではなかつた。校長の新島襄、支持者の山本覚馬、そして宣教師として協力を惜しまなかつたジェローム・デイヴィスこの三人は、三様ちがった経歴をもち、それぞれちがった

性格をもち、また、その考え方もちがっていた。デイヴィスは南北戦争を経験した軍人で、熱涙の人であり、キリスト教の伝道に情熱を傾けていた。山本覚馬は、もともとは会津の人、鳥羽伏見の戦に敗れ、薩摩屋敷にとらえられ、視力を失いつつも、心眼を開いて維新の進路を見ぬいた慧眼の人であり、京都府顧問として京都の商工・文化・行政の進展に寄与した人、二人は新島の意を体して、それぞれの賜物を生かして創業期の同志社の苦勞とともに荷負つた。たしかに、同志社の創立者は新島襄である。しかし、新島一人では同志社は出来なかつたということも事実である。同志社はその名のあらわすように、三人

の同志の人たちの協力によって出来た学校であつた。

当時新島は三二歳、デイヴィスは三七歳、そして山本覚馬は四七歳であつた。最初の同志社の学生はわずか八名（七名が寄宿生で一名が通学生）であつた。その一人ひとりの年齢はよくわからないが、かりに平均二〇歳とすると、教師たちとあわせて初期の同志社人の平均年齢は二五歳という若い集団であつた。

苦難のなかで

ある人は、伝統、因習の強い古都京都に、キリスト教を徳育の基本として学校をつくることは、比叡山に命じて琵琶湖に入れというにひとしい至難なことであるといつた。（ラネッド『回顧録』）

翌年（一八七六年）の秋に熊本から来て同志社に学ぶようになった徳富猪一郎（蘇峰）は同志社設立にあつたの困難を慶応や早稲の創立の事情にくらべてつぎのようにのべている。

若し学校創立に就て、最も順調なるものを挙げれば、慶応義塾を第一とせねばなら

ぬ。慶応義塾は福沢に依つて建立せられたりと言ふも、其の実は福沢其人と共に成長したものである。（中略）福沢は、徳川末期より既に洋学者として、天下に聞えたる人である。彼の「西洋事情」は慶応年間に既に行はれ、慶応より、明治の初期にかけて、天下無比のベストセラーであつた。洋学者と言へば、必ず第一に福沢の門戸を指すは、当時の常識であつた。

早稲田は、慶応に比すれば、其創立には、相当骨が折れたに相違ない。然し政治方面に於ける大隈は、既に学校創立以前に、多くの政治家が一生費しても尚能はざる程の大なる仕事を成就している。敵も少くなかつたが、味方は更に多かつた。（中略）大隈の為に家を貸さぬと言う者もなく大隈に向つて立退きを申込む者もなく、其教師の如きは、當時に於て恐らくは慶応さへも及び難き程の、新出の俊秀は未だ学校を開かざる以前より、既に大隈の陣中に群がり居た。（徳富蘇峰『三代人物史』四九六頁―四九七頁）

これらに比べて、新島のためには、家を

貸すことを躊躇するものや、新島が招いた宣教師のための住居を確保するのを拒むものが少くなかつた。初期の宣教師の一人、ラーネッドは、今出川通りに面したところに最初の住居を得たが、それは、つぎつぎとことわられて、四番目のものであつた。彼は家主たちがこつた理由をこつたのべている。「私たちが外国人だから拒んだのでもなく、私たちの宗教に反対したのでもないけれど、自分の家にクリスチャンを住ませた廉むづかにより、その筋から睨にらまれるのを怖れたせゐであつた。」（『回顧録』二六頁）

当時、新島襄は、一介の外国帰りの新参者にすぎなかつた。「西洋事情」については、福沢にもまさる深い理解を身をもつて体得していたが、長い海外留学ののちに、一八七四（明治七年）一月二六日に、一〇年ぶりに、ひとり静かに帰国した西洋帰りの一青年であつた。彼を知るものはごく少数であり、ましてこの無名の青年を支持する有力者は皆無といつてもよかつた。

新島の協力者

ただ新島に味方するものがあつたとするな

ら、それは、山本寛馬の協力であった。山本寛馬は一八七五(明治八)年の春、新島と出会う以前に、すでに宣教師からおくられた『天道溯源』を読んで、キリスト教に触れて感ずるところがあった。彼は、相国寺の門前の、かつて自らが捕えられていた薩摩屋敷の土地(約五、八〇五坪)を、同志社に譲渡した。さらに、その年(明治八年)一〇月一日、新島は、山本寛馬の妹八重と婚約し、翌年の一月三日結婚をなし、山本寛馬とは兄弟の間柄となった。

それ以外は、新島襄は無名の者、なんらの地盤もない西洋帰りの新参者であった。しかも、尊皇攘夷の旗風のなおうすまゝ維新のはじめ、つい数年前までは、切支丹邪宗門禁制のお札の出ていた京都で、キリスト教を正面からかかて、学校を開こうということは、きわめて無謀なことであった。

蘇峰はこういつている。

彼(新島)が基督教主義を標榜して、学校を設立すると言ふ事に至っては、恰も牛に向つて赤毛布を示す如く、寧ろ人を近附くるよりも、遠ざくる為の看板に過ぎなかつた。言はば、基督教主義の看板を掲げて

学校を開くは、伝染病の看板を掲げて、旅館を開くが如きものであった。(同上、四九七頁)

今日同志社は、大学、女子大、女子短大、四つの高校、三つの中学そして幼稚園をもち、約二万五千人を越える学生、生徒を擁し、一、三五〇人をこえる教職員をかかえる大きな組織となっているが、その創立当初において、新島は標榜したキリスト教主義の故に、多くの反対にあい、ささやかな出立をしたということ、われわれは忘れてはならない。

新島のふるさと

新島は、同志社の開業願いを、一八七五(明治八)年八月二三日に提出し、九月四日にその許可を得ている。だから、初期の同志社の門には、「官許同志社英学校」という看板がかかっていた。この「官許」という二字が、異様な印象を与えていた。わざわざ官許と特筆しなければならなかつたところに、設立当初の同志社の苦悩をうかがい知るのである。

その年、一八七五(明治八)年六月三〇

日、新島は父民治にあてて書簡をしたため、籍を安中から京都に移すように依頼している。籍を移さなくても、寄留としておいてはという意見に対して、「寄留に而ては、不都合の事も有之候間、是非に住所を変え、土族より平民に相成候共不苦」と書き送っている。周知のように新島は江戸(東京)で生れたが、彼のふるさは、安中であつた。同志社を設立するにあたって土族の身分をすてて京都を新しいふるさとしたのであつた。

その年の八月、米国留学中に、岩倉使節の随員として親しくなつた田中不二磨文部大輔がわざわざ京都に来て、新島が東京に出て、文部行政にあづかるように熱心に勧誘したが、新島は翻意しなかつた。京都をふるさととする新島の決意はそれだけ固かつた。彼は、京都をふるさととして、同志社を設立し、そこで全力を賭して働き、そこを墳墓の地とする覚悟を固めていたのである。

わたしは、同志社をあらわすシンボルとして、寒梅のふるさというテーマをかかげたが、ふるさは、日本人にとっては、ことさらに、郷愁をそそることばである。千昌夫の

うたう「北国の春」がカラオケでよくうたわれ
るのも、「あのふるさとへ帰ろうかな」という
おり返しによって「入もりあがっているから
ではなからうか。ふるさと、のふるさととは、
長い時間の経過をあらわしている。定住農耕
民族である日本人は、長い年月を一定の場所
とともに居住し、働いて来た。共通の自然風
土のなかで、四季おりおりの季節の変化を大
切にしながら、習慣やしきたりを重んじ、父
母から子に、子から孫へとうけついで歴史、
文化を遺産として、人びとは、ふるさとで生
れ、育ち、働き、そしてその土になっていっ
た。だからふるさとはいいようもなく懐しい
ところであつた。あたかも母のふところに懷
かれるよう懐しいところがふるさとである。
だからわたしたちは、自分の国を母国とい
い、自分たちの語るふるさとのことを母国
語という。わたしたちにとって同志社は、母
校であり、同志社教会は母教会なのである。

二つの柱

新島は、同志社を設立した一八七五年から
その没年である一八九〇年まで一五年間、同
志社をふるさととして、それを愛し、その重
荷を負い、そのために生命を捧げた。新島は

同志社というふるさとに二つの柱を抱いた。

同志社は、一つの円ではなく、二つの円の交
錯した楕円のようなものであつた。その一つ
は、同志社英学校という教育の場であり、も
う一つは、同志社教会というキリスト教信仰
の育成の場であつた。新島にとって、両者
は、ちょうど車の両輪のように不可分な存在で
あつた。新島襄は、同志社英学校の校長であ
つたが、同時に同志社の教会の牧師であつ
た。彼の生涯において、彼が愛好したことば
として、たびたび生徒たちに書き送っている
ことばの中に、「自由教育、自治教会、両者併
行、国家万歳」ということばがある。

『国民新聞』の伝えるところによると、新
島の葬儀にあたつて、式のち、棺をかつい
で約三、〇〇〇人の人びとの行列が若王子の
墓につづいたことが報じられている。行列の
人びとは聖句や新島の愛称のことばを記した
約二〇本の幟をかかげたが、その中でひとき
わ目立ったものは、勝安房の揮毫による「自
由教育自治教会 両者併行邦家万歳」という
ことばと、「彼等は世より取らんと欲し我等
は世に与えんと欲する」と大書された二旒の
大旗であつたという。先般刊行された加藤延

雄氏と久永省一氏の共著になる『新島襄と同
志社教会』の巻頭グラビア欄には『国民新聞』
（明治三十三年二月四日）の挿絵が出ている。
これらの記録は新島がどんなにかこのことば
を愛称していたかを物語っている。

祈りの家

新島がひたすら目指したものは、近代日本
を形成する人民の養成であつた。同志社の教
育は知識あり品行あり、自から立ち、自ら治
むる人民の輩出をめざし、同志社の教会は人
間形成の基盤となる聖書にもとづく信仰の育
成を目標とした。

それ故に同志社の教会で大切なことは、祈
ることであつた。イエスは、宮潔めるときに
「わが家は祈りの家となさるべし」（ルカ
一九ノ四六）といったが、教会の大切な役割
りの一つは、真理の前に謙虚に、くだけた悔
いし心をもつて祈ることである。

同志社が一八七五（明治八）年一月二九
日にささやかな出発をなしたとき、彼は先ず
祈りを捧げた。デイヴィスはこう記してい
る。

あの朝、開校に先立って、新島が自宅で
捧げたあのやさしい涙にみられたまじめな

祈りを私に決して忘れることは出来ない。
すべての者が心から祈った（デイヴィス
『新島襄の生涯』北垣宗治訳、六二頁）

同志社はこの素朴な祈りから出発した。當時同志社はまさに四面楚歌のなかにあった。建物も財産もなく、さしたる支持者もなかった。極端にいうなら、何もなかったが、祈りだけがあったといってもよい。その後の同志社の歴史は、神はその祈りに耳を倒けられたことを示しているといえよう。

リバイバルの流れ

この祈りの伝統が同志社の歴史の中にうつがれ、幾多の困難をのりこえる原動力となった。一八八三（明治一六）年、創立間もない同志社は、未曾有の困難に遭遇した。たゞ重なる徴兵令の改正によって、学生たちはつぎつぎと徴兵延期の特権のない同志社を去ってゆくようになった。新島は東奔西走して同志社に徴兵延期の特権を与えるように請願するが仲々道が開かれなかった。そのようななかで、一八八四（明治一七）年三月に同志社では、学生たちの間から一大リバイバル（信仰復興）の運動がおきた。このことを克明に

伝えているのが最近復刻出版された『池袋清風日記』（同志社社史資料室）である。池袋は一八四七（弘化四）年日向の都城に生れ、当初鹿兒島医学校に入学したが、病弱で果し得ず、桂園派の歌人について和歌を学び、鹿兒島の女学校で教鞭をとっていたが一八八〇（明治一三）年、上落して、同志社に入学した。当時彼は三三歳、若い学生たちから「池袋翁」とよばれていた。彼は二つの変った特色があった。一つに非常な厚着をすること、第二は毎日詳細に日記をつける習慣であった。肝心の英字はあまり上達せず、彼の尊敬する下村孝太郎は、「君に二つの註文がある、一つには日記をやめる事、二つには厚着を改める事、この二つが出来ねば、学問は駄目でせう」（松浦政泰『同志社ローマンス』）といったが、彼は二つとも実行出来ず英学校を卒業出来なかったといわれている。

そのおかげでわれわれは今日、彼の日記を通して、明治一七年三月の同志社のリバイバルの実況を知ることが出来るのである。

ちなみに、リバイバルの最も盛んであった三月一六日の彼の日記をみると「衣服同じ」とあり、その内容は三月一〇日の日記による

と、「フラン三、木、文三、袴、間、架、拾羽各（一）の上、朝起ヨリ夜寝マデ合一、文パツチ、毛襟巻一、足（袋）二ヲ加フ」とある。さて当日（三月一六日）リバイバルの情景を池袋はつぎのように記している。

○十時半ヨリ例ノ同組ノ親睦会ニ礼拝堂ニ出席、即市原、沢山、安田、松本、豊田、赤木、堀、也。吾ハ早く、我校ノ竹原、山路、海老名、原、岡本、依光、新原ノ人々自罪ヲ悔ヒ、非常ニ歡喜シ、其歡喜確信ハ自ラノ力又人ノ力ニテ得ザリシ事ヲ証シテ熱心信者生徒ニ伝道シ、専十字架ノ愛ヲ説ク。其論甚高ク、其言一々生命アルヲ確見セシヲ証シテ、市原先生ヲ始メ自ラ教員タルヲ省ミズ、虚心平氣ニシテ彼数名ニ聴キ玉フベシ。蓋今日ハ日本開闢以來ノ人未嘗テ見聞セザリシ処ノ一大奇事萌セリ、即一千八百年前基督昇天後ユダヤノ国ベンテコステノ節ニ降臨ノ聖靈、我此同志社ニ復臨シ玉ヘリ、大ニ目ヲ覚シテ、慎テ之ヲ受ケナサレ云々自ラノ経験ヲ述ヘ、未此聖靈ノバプテスマヲ受ケザルモ聖靈ノ告ヲ受テ之ヲ勸ム云々熱心ヲ以テ説ク、凡一時間余也。市原先生ヲ始メ各謹テ聴ケリ、十二時

前二及フ『池袋清風日記』明治十七年上、
一三頁—一四頁

このリバイバルの結果として、同志社の学生たちは、全国各地の伝道に赴き、それぞれの地域の教会の設立に貢献した。同志社はその一一一年の歴史において幾多の困難に遭遇したが、それら乗り越えることが出来たのは祈りの伝統であったといっても過言ではない。

明治四〇年、原田助が同志社社長となり、同志社教会の牧師を兼ねたが、兵庫教会より武田猪平を同志社教会副牧師兼同志社總寮長兼宗教主任として迎え、宗教活動と教育活動の両者の連繫と推進をはかっている。

同志社は、昭和のはじめにきわめて盛んなリバイバルを経験した。その原動力となったのは同志社教会で、その創立五〇年を記念としてハワイから招いた堀貞一によって感激にみちたリバイバルを経験した。法学部の指導的教授であった中島重は若王子山頂の墓前で信仰告白をなし、献身の決意を表明した、堀貞一はそのあと（一九二七年）、同志社教会牧師兼同志社宗教主任として、同志社の宗教活動の進展のために寄与した。

さらに、戦後においては、戦争に積極的に参与した懺悔と新しい日本の建設への献身の祈りの運動が学生たちの中からおこり、それに応えて、湯浅八郎総長は、アメリカン・ボードの教育部長であったルース・I・シーベリ女史を教育顧問として同志社に迎え、学生間の宗教活動を進めるようにはかった。折しも福井におきた大震災には、学生教職員が一体となって奉仕活動にあたり、その後キャンパスの宗教活動をすすめる力となったのである。

今世紀のすぐれた哲学者M・ハイデッガーは、今日の文明の悲劇は、技術の進歩によって、人々が地理的なふるさとを失ったのみでなく、精神的ふるさとを失ったということを指摘している。同志社の精神的ふるさととは、祈ることであった。天にあるふるさとの力によりたのむことであった。

寒梅のふるさと

ふるさとの野山には、木々が茂り、草花が咲いている。新島はどのようなふるさとの草花を愛したのであろうか。

新島は一八六四年、二一歳で国禁をおかしてひそかに海外渡航を試みたとき、つぎのよ

うなうたをうたっている。

もののおもひ立田の山もみじ
にしき着ざれば など帰るべき

ここでは、新島は、紅葉をシンボルとして成功をおさめて錦を着てふるさとに帰ることを目標としてうたっている。やがて、一八七四年、一〇年余の海外の研鑽を終えて、故郷安中に帰ってきたとき、彼はこううたっている。

ふる里にかざる錦ははこの中
身にまとうべき時にあらねば

ここでは、新島は錦はこの中といっているが果して、それは実際には何を意味していたのかは興味ある問いである。わたしは、新島のふるさとへの本当のおみやげは聖書であったのではないかと思う。

京都にふるさとを移してから新島が愛してやまなかったのは寒梅であった。寒梅は、冬の厳しい寒さの中に、そとさく花である。梅にはばらのような華やかさはないし、ぼたんのようなあでやかさはない。むしろ、それ

は苦難の中に耐えながら、創業期の同志社の育成にあたった新島にふさわしい花であった。彼は、つぎのように詠たっている。

真理は寒梅に似たり

敢て風雪を侵して開く

新島の生涯は、苦悩の連続であったといってもよい。基督教主義の学校を京都に設立するにあたっての労苦があり、信徒たちの熾烈な反対に出あった。さきの池袋日記には、同志社人に対する明治一七年九月二八日付の平安慨士神風連からの脅迫状がある。それによると、当時同志社で働いていた四人の宣教師を僧妖米夷と称し新島を妖賊妖民と呼び、すぐにも打ち殺すべきであるが、二週間の猶予を与えるので直ちに家族と共に京都を立去るようにというすさまじい脅迫状であった。（『池袋日記』下、一五二頁—一五三頁）

あまりに、キリスト教に対する反対が厳しいので、学校設立のために新島は一つの条件をのんだ。それは、聖書を同志社の校内では教えないというものであった。それを聞いた宣教師たちは、自分たちが万里の波濤を越えて日本に来たのは、聖書に根ざした福音を伝

えるためであって、それが出来ないなら、直ぐにでも荷物をまとめて帰るといって新島を困らせた。学校が始まった翌年の九月に同志社に大挙してやって来た熊本バンドの青年たちは、意気さかんで、開校当初の同志社を批判し、またある者たちはストライキをし、新島は自責の杖を自らに加えて責任の所在を明らかにした。どちらからも責められ、どちらを向いても苦難を負はされた人が新島であった。

さらに、新島は決して頑健な体の持主ではなかった。持病として眼病を患い、いつも偏頭痛をもち、全身の節々にリウマチは侵透し、胸は病におかされていた。満身創痍の中で彼は、東奔西走、同志社大学設立のため、また、地方の伝道のために粉骨砕心して働き、その業なかばにして、四十七歳で大磯で病死した。彼の生涯はその点からいうなら悲劇の生涯であった。しかし、新島の生涯が人びとの感動をよぶのは、彼が幾多の苦難に屈せずいつも希望をもって前進していたというところにあった。

疲れを覚えた新島は、ふと庭先きに目をやると、厳寒のさ中に、寒梅の枝先きにふつく

らとした蕾をみたにちがいない。彼はうたった。

庭上一寒梅

（庭上の一寒梅）

笑侵風雪開

（笑うて風雪を侵して開く）

不爭又不力

（争わずまた、つとめず）

自占百花魁

（おのずから占む百花のさきかけ）

旧約の予言者エレミヤは若いとき、万国の予言者になるように召命をうけた。「わたしは、ただの若者にすぎず、どのように語ってよいかわからない」とことわると、さらに、主の言葉が彼に臨んでいった。「エレミヤよ、あなたは何を見るか」。彼は答えた「あめんどうの枝を見ます」と。（エレミヤ書一ノ四—一二）

春のさざし

当時イスラエルは大国にかこまれていた。ときは冬であり、万物は肅々と枯れていた。すべては滅亡に傾いていた。そのときエレミヤは、あめんどうのつばみをみた。そこに彼は生命のはためきを見ると共に、真理が彼と共にあることを覚えた。あめんどうはヘブル語でシャケド（Shaked）とつて、「目覚め

る」という意味をもっている。あたかも春をよびますかのように、他の花にさきがけて咲くからであった。あめんどうは、一月末から二月上旬にピンクの花をつけ、四月には、ひらいた実になり、これがアーモンドといわれている。

寒梅をみた新島のおもいは、あめんどうをみたエレミヤのおもいに通ずるものがあつた。彼は困難のさなかに、生命が彼と共に働き、やがて来る春のおとずれを予兆していることをうけいれたにちがいない。寒梅はやがて来る春のきざしであつた。

わたしたちは、寒梅をことさらに愛した新島のころをしのぶと共に、寒梅のふるさどである同志社のためにともに祈りたいとおもう。

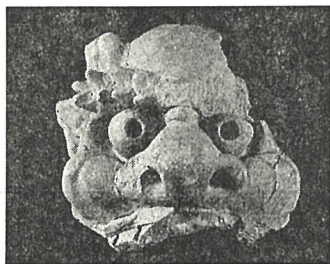
(大学神学部教授)

※本稿は一九八六年一月二三日・同志社創立一二一年記念礼拝説教を原稿に書き直したものである。

同志社校地出土の埋蔵文化財(Ⅱ)

鈴木 重治

相国寺の鬼瓦



室町時代 現存高 27cm
1976年8月 同志社中学校体育館地点
(相国寺址) 出土

京都市内の発掘調査でも、出土した遺物や遺構の年代の検討に、しばしば手懸りを与えてくれるのが火災によって形成された焼土層である。とりわけ、年代の明らかな火災時の焼土の堆積は、層位を重視する考古学では相対的な年代の前後関係を決める上での鍵層として評価する。つまり、遺物などの年代決定に当っては、形式や製作技術上の特徴に加え、出土層位が物言うこ

とになり、年代上の基準資料の確認をみることになる。

ここに示す鬼瓦も、室町時代の前半に年代の与えられる基準資料である。

同志社中学校の体育館建築に先立つ発掘調査では、上層の江戸時代の焼土層と、下層の室町時代の焼土層とでは、包含された遺物群の違いも明瞭であった。この鬼瓦を出土した廃棄土坑からは、大量の瓦が出土しており、応仁の乱の際に焼け落ちた相国寺の伽藍の一部に使用されていたものと考えられた。つまり、製作年代の下限が与えられた基準資料ということになる。

この鬼瓦の製作上の特徴をみると、まず指摘されるのが彫りの深い造形と、均整のとれた各部分の力強い造形である。また、剝離部や裏面に残る製作過程でのナデやヘラケズリは、きわめて粗い。形態的には、大きく突出した眼球、小鼻を左右に張り出した雄大な鼻、肉付き良く二段に波打つ頬、二列に逆立つ角錐状の眉毛など、それぞれにバランスよく配置されている。

(同志社大学校地学術調査委員会 調査主任)

教育をささえるもの

渡 邊 和 子

ただいまご紹介をいただきました渡邊でございます。ちょうど明日までキリスト教の、祈禱一致週間ということで、この同志社に伺わせていただいたことも、そして皆様とご一緒に礼拝にあずからせていただいたことも大層ありがたいことだと思っております。

私はお話をさせていただく前に、いまどういう立場にいるかということや、どんな教育を受けたかということをし申し上げさせていだいたほうがいいかと思いました。

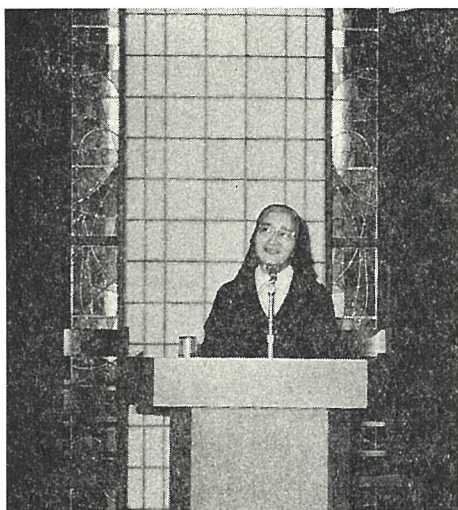
浄土真宗の家に生まれまして、十八歳まで仏教徒として過ごしております。小学校は禪宗の成蹊小学校に通い、その後、四谷の雙葉、聖心、上智大学に勉強し、その後七年間ほど職場で仕事をさせていたから、二十九歳のときにノートルダム修道会に入会をいたしました。修道会のほうから派遣されまして、アメリカで約五年生活をいたしました。その間、修練期を終え、ひき続き学位を取って、昭和三十七年に日本へ戻り、岡山に赴任する命令を受けました。その直後に二代目の学長が亡くなりましたものですから、三十

六歳で第三代の学長に就任した訳けです。普通、三代目は身上をつぶすということを言われておりまして、たいへん危うんでありますが、いまのところみんなに支えてもらいまして、こととして二十四年度の学長をさせていただいております。

現在、二千二十七名の女子大生をお預かりしておりますが、同じ校内に附属小学校と附属幼稚園があり、私はその幼稚園長を十五年間、小学校長を六年間兼務させていただきました。現在は大学の学長一本でさせていただいております。

以上が私の簡単な履歴書でございます。

きょう、このような会に招いていただきまして、まずこういう研修会をお持ちになっているということ自体がすばらしいことだと思えます。私どもの大学では二千二十七名のうちで、信者と呼ばれる者が約二・五％、五十名でございます。千九百七十名ほどの学生はキリスト教と無縁の人たち。それから教職員が約二百名おります中で、信者の教職員が約二割、四十名ほどではないかと思っております。



講演中の渡邊和子 ノートルダム清心女子大学学長
(1987年1月24日於、新島会館)

す。その中でキリスト教の教育をどのようにしていくか。いわゆるミッションスクールであり続けるためにはどうしたらいいかということに悩みもし、そして努力をしている毎日でございます。宗教学四単位を必修の単位にいたしております。二百二十四単位の中でキリスト教概論、聖書学または人間学の中から四単位を履修するようにということをお定めております。しかし、礼拝というものは一切強要しておりません。年に一度追悼ミサ、それから入学式のミサ、卒業式のミサ、これにその関係者が出席することになっております。

私は学長になりましたから、毎週四時間授業を持っております。

て、前期は道德教育の研究、これは教職課程履修者の必須でございます。それを二単位、二クラスに分けて教えております。後期、ただいまは人格論（パーソナリティ・デベロプメント）と呼ばれるものをこれまた二単位、二クラスに分けて教えております。そういうことで管理職にありながら、学生たちと週四時間は会っており、さらに学生たちと聖書の研究会を開いたり、いつでも来ていいというようなことで話し合いの機会をつくるようにしております。

キリスト教の教育というものを考えるときに、いまのような状況で何ができるだろうか。無神論の教師、または仏教、神道の人たちも心をついにして、私たちの大学がよって立つところのもの、すなわち建学の精神、それを失ったならば存在する必要のない、その精神をどのようにして子供たちというか、学生たち一人一人に伝えていけるだろうかという点で、私は人格の教育というものを教師たちと進めていきたいと考えてまいりました。これはいわゆる人格教育ではなくて、一人一人の学生、生徒、幼稚園児、その人たちを一個の人格として育てていくという教育でございます。

ガブリエル・マルセルというフランス人の哲学者がかつて訪日し、東京大学で、「教育と自由」という題で講演をいたしましたときに、「人は皆人格だと言っけれども、真に人格と呼べるものは自ら判断し、判断に基づいて決断し、決断した結果に対しては、あくまでも責任をとる人だけに言われることである。したがって、付和雷同するようでは、単なる人間ではあっても人格とは言いがたい」ということを述べております。

これはある意味で、私たちに人格の教育をするということはどう

ということなのかを言い表わしています。生まれたときに人間として生まれます。その人間として生まれた者が、自分の頭で考えて、自分の自由意思で選択して決定する。その代わりにその決定に対しては、他人に責任を転嫁しないで自分で責任をとっていく時、一人格としての生き方になります。これは人間の成熟していく、または成長していく一つの方向というものをあらわしており、教育という点においても私たちがどういう教育をしなければならないかということを示しているように思います。そしてなぜこれがキリスト教の教育かと言うと、創世記の第一章に、神がいろいろなものをおつくりになった後で、「我々にかたどって人をつくらう。」いわゆる神の似姿としての、イマゴ・デイとしての人間をつくらったということが書き記されているからです。しかもその神は三位一体の神である。トリニティと申しますでしょうか、三つのペルソナを備えながら一体の神である。その神に似せてつくられた人間は一人一人がペルソナとして、パーソンとして、つまり一人格としてありながら、愛によって一つに結ばれて共同体をつくっていく。こういう人間のあり方、人間相互のあり方がキリスト教の教育の根本にあっているのではないだろうか。必ずしも教義を教えることのみがキリスト教の教育とは言えないのではないだろうかと考えます。

また私もカトリックのようなところだと、マリア様の像とかイエス・キリストの像とかいろいろなものが置いてございますし、チャペルからは聖歌が流れて来ます。しかし、だからキリスト教の学校だというのは余りにも皮相的、表面的なことではないだろうか。キリスト教の教育の根本は、そして特に非キリスト教国と呼ば

れ、キリスト教信者の数の少ない日本において、人々が心を一つにすることができる教育は神の似姿という言葉を使わなくても、一人格、ペルソナへと育っていく一人の人間を育てることではないだろうかと思っております。

人間というのは、「何ですか」という問いかけに対しての答えです。「あれは何ですか。木ですか。石ですか。犬ですか。猫ですか。」「いいえ、人間です」と。ところが「あれはだれですか」と問われて、それに答えるのは人格だと私は思っております。「What is it?」それに対しての答えは「人間」と。ところが「Who is it」に対しては、名前を持った者が「私です」、「私がしました」、「私はしませんでした」と答えなければならない。それは男女の性別とかかわりなく、私たちの教育が目指す人間の姿ではないかと思っております。

学生たちの中に大学生にもなりますと、人格を認めてほしいとか、人格が無視されたとか、そういう言葉で苦情を言いに来るような人たちがおりまして、私はたいへんそれをうれしく思っております。あなた方が自分の人格が無視されたと言って腹を立てることは本当にいいことだと思う。自分たちの人格を尊重してほしいと申し立てをすることも私はうれしい。その代わりに人格として責任をとるだけの気構えを持ってください。もう大学生になったんだから独り旅をしたい。夜遅くまで外出していたい。父親母親の干渉を排除したい。だれとつき合っていないようが自由だ。何時までもうちに帰らないでいようとも自由だと、そういうことを申しますときに、確かにその自由がある。けれども、その自由の結果をとる覚悟をして

から主張しなさいよ。それが人格と呼ばれるものだと思うということを話しておりますが、確かに人格という言葉には恐ろしさも從つて含まれていると思うのです。がんじがらめの規則、校則、そういうものに縛りつけておくのではなくて、本人の自由を尊重し、本人の理性と自由意思と呼ばれるものに尊敬を払っていくということは、確かに間違いを起すまでもございます。しかしながら、その間違いを温かく見守ってやること、その間違いが取り返しのつかない間違いにならないように判断のプロセスにおいて援助をすること。そして最終的な決断は学生一人一人にゆだねていくこと。そのことが教師としての一つの愛のあらわれであり、また神の似姿としてのペルソナに一人一人を育てていくことと無関係でないように思えます。

人格と呼ばれる者は名前を持っています。このことも私は大切にしております。二千名もおりますと一人一人の名前は覚え切れませんけれども、私はできるだけ学生を名前で呼ぶようにしています。授業を現在三百五十人、二クラスに分けておりますから約百八十名ずつにしておりますが、必ず出席をとります。中には時間がむだではないかと言う人もおりますけれども、私は「欠席は調べていません。出席を調べているのですよ」と言うんです。私が呼んだ人がここにいないということ、そのことが私にとってはすごく大事なことです。欠席を調べるための名前を呼んでいるのではないのです。あるとき、一人の学生が病気で入院しているところから手紙を書いてくれました。「いまごろ、先生が私の名前をちやうど呼んでくださるころだと思つてうれしくなりました」という手紙でございました。

た。そんな手紙を受け取ることは何年に一度あるか、ないかです。しかしながら、そういう気持ちでいた人が一人いたということは、それだけでも名前を呼んでよかったと思います。そしてもしかしらば、手紙は書いてくれないけれども、同じ思いの人たちがいないと言ひ切れません。現在ほとんど朝から晩まで名前と呼ばれることのない人たちが一週間のうちにたった一度でもいいから、何々さんと呼ばれるということ、そのことは案外大切なことではないだろうかということを考えています。

名前はその人のかけがえなさをあらわすものであつて番号ではない。学籍番号というのが学生の一人一人についております。教師の中には一番、二番、三番と言つて呼ぶ人もいるようですけれども、私は番号で呼ばない。それはやはりあなた方一人一人は名前を持っているんだ。そして名前を持っているということは、人格として自分がこの世にかけがえのない一人として存在していることを認められ、そして自分でも意識することにつながると思うのです。

聖書の中に「よき羊飼いはおのれの羊を知り、名前を呼んで引き出す」というところがあったと思います。名前を呼んで引き出す。教育という言葉のラテン語、*educare*は何々から引き出すという意味を持っております。こじつけかもしれないけれども、私は聖書のこのよき羊飼いであり、よき教師であつたキリストは一人一人を知っていた。そして名前を呼ぶことによってその子が持っているポテンシャルなものを引き出すことができたのではないだろうか。そして私たちキリストに倣う者、キリストの後に続いて、この職にあずからせていただいている者は、やはり子供たちの中にある可能性

を引き出すことが必要でないだろうか。そしてその引き出す一つの道は一人一人を名前で呼ぶこと。それは一人一人を大切にすること、うことだろうと思います。学生たち一人一人に自分を愛すること、自分の価値に目覚めることを名前を呼ぶことによって教えていきたいと思うのです。

ちようどきようが共通一次の第一日目のようにございますけれども、ある高等学校の先生が私に「最近、僕は廊下で高校生とすれ違うと、その子の名前よりもまず偏差値が浮かんでくるんですよ。あの子ならばあの大学がほしい。あの子はあの大学は無理だろう。名前よりもまず偏差値がパツと浮かぶ、その自分が恐ろしくなりまして」と話してくださいました。そういう環境の中で育ってきた人たちが大学に入ってまいります。自分の価値を他人と比べての価値でのみ計っている人たち、または自分の価値は偏差値であらわされていると考えている人たち、言葉をかえて言う、何ができるかという価値、いわゆる利用価値の中で育てられてきた学生たちが多うございます。名前を呼ばれたことのない人たち、偏差値でしか覚えられなかった人たち、そして自分自身も自分の価値というものに自信を持っていない、そういう人たちにたくさん出会います。

その人たちに、まずあなたはあなたのままで価値があるのだ。何ができるか、できないかということと無関係に、または家柄、財産能力、学歴、そういうものと全く無関係にあなたにはあなたの、ほかの人で代わることでできない価値があるのだということが私たちが守っていかねばならないキリスト教的な価値と呼ぶものではないだろうかと思えます。それは利用価値に対して存在価値、そこ

にいるということ、生まれてきたということがすでに価値であると言ふことです。ちようど「使命」という言葉は命を使うと書きましように、何かえらいことをしたからその人の生涯は価値があつたのでなく、後世に名が残るような仕事をしたからその人はこの世に生まれてよかったのでもなく、そういうことと無関係に、とにかく与えられた、いただいた命を使うこと、それが人間一人一人の最も根本的な使命なので、寝たきり老人でも、ぼけ老人でも、病人でも、またはしうがない、いわゆる迷える一頭の羊であつたとしても、命を使うということにおいて他の人が代わることでできないその人の価値があるのだということや大学の四年間に肌で感じてほしいのです。そしてそれを感じさせるのは教師の一人一人が、一人一人の学生を名前で呼ぶ気持ち、名前で呼ぶ教育を行うことによって知らしめていくことではないだろうかと思えます。

いまから約四百四十年前、キリスト教が初めて日本に渡来いたしましたときに、宣教師の人たちは言葉でたいへん苦勞をなされたようでございます。いまのようなテキストもなければ、日本語学校もないし、教育法もなかったその時代に、宣教師の人たちが極めて乏しい語彙の中で、これだけはどうしても伝えたいと思つたことが神の愛、神は愛であるということだったと言われております。

今日残っておりますこの人たちが使つた辞書の中に、その「愛」という言葉を大和言葉で「こゝろがたけ」と表わしております。仏教で「愛」という言葉は、物事や人に執着するという意味を持ていて、余り歓迎されない言葉だったようです。したがって、当時の宣教師たちは、「神」の代わりにデウスというラテン語を使い、「デウスの

「ご大切」という美しい言葉で神の愛をあらわしております。

その当時は、封建時代で男女の性差別が随分際立っていましたし、若い者と年をとった人、身分の上下、そういうことで人々が軽んぜられたり、疎んぜられたり、または大切にされたりしていた時代でした。したがってこの宣教師たちがあなた方一人一人は女であろうと男であろうと、年が若かろうと年寄りであろうと、身分、階級、学歴、そういうものと一切かわりなく、デウスのご大切ですよと告げたとすれば、それは実によき知らせ、福音だったのだらうと思います。

そしてその同じ愛、よき知らせをこの一九八七年の日本において私たちは告げ知らせていかなければいけないのではないのでしょうか。聖書を読み聞かせる以上に、最も原点に置かれなければならないことは、言葉を、み言葉を述べ伝えるその底に、私たち一人一人の中に、伝える相手に対しての「ご大切」というその心があるかどうか、無条件に相手を大切だと考えるその愛があるかどうかということとです。

親鸞聖人でございましたか、「善人なおもて往生す。ましていわんや悪人をや」と、悪人正機説というありがたいみ教えを説いていらっしゃるんです。私どもの常識の真反対でございまして、私どもですと、悪人でさえ大往生を遂げるんだから、ましていわんや善人は大往生を遂げること疑いなしと言いたいところを、善人でさえ救われるのだから、ましていわんや悪人は仏の慈悲の大切な対象になるというのです。そして同じことを「医者が必要とするのは健康な人でなくて病人である。私は義しい人を招くためではなくて罪人を招く

ために来た」というあの慰め多いキリストのみ言葉の中に見出すことができます。これはいずれも無条件の愛を表わしています。そしてもし神の愛、仏の愛にえこひいきがあるとすれば、それはむしろ品行方正な兄でなくて、放蕩息子の子に注がれた愛であり、または九十九頭の言うことを聞く羊でなくて、しようがない迷い出た一頭の羊に対する愛なのだと、このことをやはり私たちは時折思い出すことが必要だと思います。

ただ、これは非常に難しい問題を含んでおります。あるとき、公開講演でこの話をいたしましたときに、一人の男子大学生が、「先生、さっき一頭の迷える羊を捜しに行くことを言っていたらしたけれども、もしもその羊が伝染病を持っていたとしても、あなたはその羊を九十九頭のところへ連れ戻すんですか」と質問してきました。これは現在、教育界で私たちが退校処分しなければならぬような、またはさまざまないわゆる罰則を適用しなければならぬ、そういう人たちにも当てはまる難しい質問でした。

正直なことを申しまして、私はそのとき答えられなかったんです。私はそこまで考えてなかったということで、後である方に伺ってみました。その方は外国の宣教師だったのですけれども、伺ってみましたら、事もなげに、「よき羊飼いいはいやす力がありますよ」とおっしゃったんです。ああそうかと思ひまして、なるほど伝染病をたとえその一頭が持っていたとしても、それを捜しに行くということ自体がいやしとなる。そしてそれを捜しに行く羊飼いいはいしの力を持っているということも考えられるという点で一つ、ディメンションといえますか、思いを広げていただいたような気がいたしました。

ました。

しかし、これは現場におろしてまいりますと、なかなかそうきれいは片づかない問題とあります。私自身もいろいろなことにぶつかっておりましても、ただ根本的に難しいからできないんではなくて、難しくて努力をするというところに私たちの教育は救いを見出すのでないだろうか。難しいからと言ったら何もできない。だけれども、難しいけれども、やってみようというところに多分キリスト教の教育というものがあるのでないでしょうか。現世において完全なことは決してなし得ない。私たちのキリスト教教育が完全にできると思ったら、それは思ひ上がりだと思えます。生身の人間を相手にして、そして生身の教師が当たるわけです。そうだとすれば神様がなさるようなことは私たちにはできない。にもかかわらず、ギブアップしないところに、神の力が働くのでないでしょうか。転びながら、そして自分を反省しながら、自分が罪人でどんなに弱い、ある意味で学生たちと同じように許されなければならない人間だということを、むしろそういうことで自覚させていただいて、私は二十五年間、教育を続ける勇気をいただいていたように思います。

学生たちにとって「愛する」ということはとても大きな関心事です。オリエンテーションに毎年ついでまいりまして、二泊三日のつき合いを約一週間入れかわり立ちかわりいたしますけれども、各学科の学生たちが持つてくる流行歌はほとんど恋、愛、スイートハート、ラブングといった言葉で埋まっています。そういう流行歌を一緒に歌ったり聞いたりしております、学生たちの世界における愛

というのは、主に甘い愛という感覚でとらえられていて、かつての宣教師たちが持っていた「ご大切」、本当に相手の人をかけがえない一人として見るということからはほど遠いのだということをしみじみと感じます。

ただ、だれかが言っておりますように、相手の入り口から入って、こちらの出口から出ることが大切なのでないでしょうか。最初からこちらの入り口から学生たちを入れようとしても入りません。ですから学生たちと同じ入り口から入りまして、四年間たつて出るときには少し自分の、このキリスト教的な学校の出口から出てほしいなというような望みを持って生きております。

学生たちによく話しますのは、愛することとは好きということと同じじゃないんだということです。好きというのはあの人が好きで、あの人は嫌いといった感情、生理的なものだけれども、愛するというのは単なる強い感情ではないんですよ、そこには意思があると言いますと、学生がいかに軽べつしたような顔、シスターは愛したことがないんじゃないかというような顔をいたします。

私はエーリッヒ・フロムという人の書いた『愛すること』、紀伊國屋書房から出ておりますけれども、その中に「愛するということとは単なる強い感情ではなくて、それは一つの決意であり、判断であり、約束である」という言葉が好きで、それを学生たちにも話すわけです。だから、いいかげんな気持ちで愛するということとはできない、線香花火のようにパツと輝いて、そしてポツと落ちてしまふ愛は真の愛ではない。愛するということは愛し続けるということとを除外しては考えられないんじゃないだろうか。

また愛するということは、すばらしい相手に出逢った瞬間その人に燃え上がるような感情を抱くことでもない。もちろんそういう場合もあるけれども、実は生まれてから死ぬまで私たちが自分の中に養い育てていかなければならない力なんじゃないだろうか。いまの教育は性教育を随分きめ細かに行っておりまう。またいまの教育は英語の力、数学の力、またはその他さまざまな力をつけることに躍起になっております。育児の仕方、おいしいお料理のつくり方とか、ハウツウと呼ぶものがたくさん出回っておりまうけれども、人間にとって、または人間の幸せにとって上手にお料理をつくるよりも、上手に子供を育てるよりも、もっとも大切な愛するということこの教育は家庭においても学校においても、案外されていないのではないでしようか。もちろん「愛」という教科を朝の九時から十時半まで教えるというようなカリキュラムはあり得ないと思いまうけれども、カリキュラムを外れて、つまり人と人との出会いを通して、あなたは私にとって本当に大切な人なんだ。そういう愛の本来の姿というものが案外忘れられていのではないだろうかと思うことがございます。

あるとき、学生たちに授業中、「あなた方、愛の反対は何だと思う」と尋ねたことがあります。そういたしましたらば、たくさんの学生は「憎む、憎しみ」と答えてくれましたけれども、何人かの学生は「憎しみもそうだけれども、無関心ということが愛の真反対にあることではないでしようか」と答えてくれ、とてもうれしかったことがございます。

確かに愛憎という言葉があるほどに、愛の反対語は憎しみだと思

います。しかしながら、憎んでいなければ愛しているかと言うと、決してそうでないと思う。私たちの教育はもちろん憎んではいけないということ教える教育だとは思いまう。しかしながら、積極的に愛するということ教えているだろうか。余りにも無関心におぼれている人たちに、もっとかわわっていくことを積極的に教えているだろうかということ私はよく反省させられます。そして愛することへの教育は、だれもが愛せる者を愛することではなくて、だれからも顧みられない価値なきかに見えるものに愛を注いでいく、そういう教育、それは先ほどの無条件の愛に近づいていく教育だと思ふのです。だれからも顧みられない価値なきかに見える者に愛が注げる人に私たちは学生を育てているだろうか。それはやはり人格の教育でもございます。なぜならば、人格の教育というのは自分で愛すべきものと判断して、愛していこうと決意して、そして愛し続けることを約束していくもので、それは人格としての特権であり、人格としての姿だろうと思うからです。

いま、ちまたにはらんしている愛、アイドルと呼ばれる人たちに飛びついていく青少年たち、大学生もそうですけれども。タレントと呼ばれる人たちにそれこそ群がっていく若い人たち。その人たちはだれもが愛せる者、ある意味でスポットライトを浴びてステージの上でピカピカ輝いている。そういうものに難なく飛びついて行く愛を持っている人たちです。

私たちの教育、つまりキリスト教の教育というのは、そういうものも愛してもかまわないけれども、ピカピカ輝いていない、くすんだ、どこかの片隅でしょんぼりしている、またはその人とかかわり

を持つても何の得にもならないものを愛して行く教育ではないでしょうか。迷える一頭の羊、そういうものにかかわっていただけるかどうか。ボランティアを喜んでする人たちを育てているかどうか。いわゆる損だと考えられること、そんなことしたって何の得にもならない。価値なきかに見えるものに「ご大切」という言葉、感覚を持てる人を育てているかどうかということがキリスト教的な教育として問われているのではないかと思います。幸せな人というのは当たり前が愛せる人であり、さらに言えば自分にとってマイナスの者さえ愛せる者、つまり愛するものをいっばい持つている人が幸せな人だと私は思っております。

幸せの定義というものは古今東西数多くございますけれども、私は幸せな人というのは、価値あるものに取り囲まれている人だと思えます。どれほどたくさんのお金を持っても、まだ足りないと思っている人は不幸せな人です。ほかの人が見て立派なうちに住み、豪華な暮らしをし、そして配偶者にも子供にも恵まれている。あの人はお幸せな方だとはたの者が言ったとしても、その人が夫に不平を持ち、妻に不平を抱き、自分の子供はできの悪い子供だとして考えていない。住んでいる家も持っているものも全部ありがたいと思えなかったら、多分暗い顔をして、そして不平いっばいの顔で生きているだろうと思います。

だから、幸せというのは、確かにある程度、みんなに共通した基盤的なものは必要だと思いますけれども、それさえもやはりそれを自分にとって価値あるものと見ることが出来る人かどうか。ありたいと見ることが出来るかどうか。そこに大きくかかっているよ

うに思うのです。

一人の卒業生がまだ若くして入院をいたしました。二年ほど病院生活を送りましてから、ある日、手紙に、「先生、ようやく外出許可がいただけました。久しぶりに地面を踏んだときに感激しました。いまの私には当たり前がすべて輝いて見えます」と書いてくれました。

その手紙を読みまして、かつては親をのろい、世を恨んでいたその卒業生がいま、外出許可を得て地面が踏めるほどに病気がよくなったこともうれしゅうございましたけれども、それ以上に私がとてもうれしかったのは、当たり前が輝いて見えますと書いてくれたことです。病気のときには病院のアスタイルしか踏めなかった自分が地面が踏めるようになった。その地面を踏んだときに心が揺さぶられた。そしてかつて当たり前と思った掃除、洗濯、買い物、料理、そういうことがいままですべて輝いているんですよ。あれもできる、これもできた、いままですべてに頼まれなければできなかったことができるようになりました。これはやはり幸せを見つけた人だと思えます。

そして反省させられたのは、私自身がどれほど当たり前を当たり前ととっていたか。当たり前を愚痴の材料にしていなかったかどうかということです。自分でも時々怖く思いますのは、自動ドアがないときに、どうしてもここは自動ドアにしないんだろという気持ちを持てを最近持つことがございます。またはエスカレーターやエレベーターがなくて歩かないといけない。こんな立派な建物なのにどうしてエスカレーターがついてないのだろうか。別にこの会館を申し

上げているわけじゃないんですけれども(笑)。とてもすてきな会館です。考えてみますと、ドアを押して入りたくても押せない人がこの世の中にいる。足で上がって行きたくても行けない人がこの世の中にいる。それなのに私はそれができる。にもかかわらず、なぜ自動ドアがほしいのか、エスカレーターがほしいのか。ほしいのは楽をしたいからです。やっぱり私の気持ちの中にはすべてを当り前と考えてありがたいという気持ちが強くなっていると思います。ありがたいという言葉は、あることが難しいという言葉でございますね。私たちは随分ぞんざいにこのありがたいという言葉を使っておりますけれども、よく考えてみると、あることが難しいものはたくさんございます。

ここにいらっしゃる方はみんな十八歳以上の方だと思えますけれども、昔から日本に「鬼も十八、番茶も出花」という言葉がございまして、私は学生たちに、あなた方は出がらしだということを言うわけでございます。みんな十八歳以上でございますから。その出がらし族というのがこれから生き生きと生きていかないといけない。あなた方は化粧品をよく使っけれども、お金のかららない化粧品というものが世の中には幾つかあって、その一つは、今日という日を一番若い日だと思って生きることなんだと。確かにいままで五十何年生きてきた結果としてのきょうは一番年をとった日でもあります。母親の胎内から生まれた日から教えますと、きょうは一番年をとった日でもございますけれども、あしたはもう一日年寄りになります。ということは、きょうは自分にとってザ・ヤングスト・デイ・オブ・マイ・ライフ、きょうは自分にとって一番若い日なので

す。きょうは自分にとって一番年寄りだと思って生きていらっしゃる方は、立つときも座るときも、どっこいしょと言って立つたり座ったりなさいます。昭和六十二年の一月二十四日という日は、その日がどんなに嫌な日であったとしても二度とない日だ、ありがたい日だと、そう感謝して生きることができるときに、その人はやはり当たり前を輝かして生きることになります。

そしてさらに私たちが学生たちに教えたいのは、マイナスの価値しか持たないものも愛し、苦しみさえも愛することができるとなることです。キリスト教の根本に十字架と復活がございます。そして十字架なしに復活はなかったということ、学生たちに復活の話をしても、これはとんちんかんな話になってしまいます。しかしながら、学生たち一人一人は思うままにならない世界を生きております。つまり十字架をたくさん担って生きてます。生まれつきの十字架を持っている学生もいれば、思いがけない十字架を与えられる学生もおります。その人たちに苦しみというものは決して悪ではない。もちろん自分が求めて得るものではないかもしれない。山中鹿之助ならば艱難辛苦を我に与えたまえと言えますけれども、私たちは特に苦しみをくださいと祈らなくても、結構いただいております。その苦しみというものをどのように受けとめていくか。それがもしかすると十字架と復活というものを基本とするこのキリスト教の教育の中で一つの大切なことだろうと思うんです。

私どもの大学の正面玄関に一つの詩がかけられておりまして、プロテスタントの牧師で、河野進とおっしゃる方が書いてくださった詩です。「天の父様、どんな不幸を吸っても、吐く息は感謝であり

ますように、すべては恵みの呼吸ですから。」

学生たちが学生でいる間はまた守られておりますけれども、この正面玄関を背にして巣立って社会へ出ますと、不幸というばい菌がいっぱい漂っている空気を嫌が応でも吸います。そのときにそのまま吐き出す人になってほしくない。より大きな不幸にして人に吐きかける人にもなってほしくない。自分の中で感謝に変えて吐き出す人、そんな強い人になってほしい。その気持ちが私たちにその額を正面玄関にかけさせているのです。

私たちの敵をも愛せよということをキリストが聖書の中で言っているらしいですが、これは本当に難しいことだと思います。

私は自分の父を二・二六事件で殺されておりますが、いまから数年前、ちょうど二月のそのころに、あるテレビ局から出演を懇請されました。修道者でございますので断りましたけれども、どうしても、右傾化している日本で現在、殺された側の唯一の生き残りの証人として出てほしいということで、出たことがございます。

そのときに私の思いがけないことに、同じスタジオに父を殺した側の兵卒の方が一人呼ばれてきていらっしました。録面取りの時間まで二人で何も話すこともなくて、局の方が気をきかせて、地下の喫茶店に連れて行ってコーヒーを出してくださいました。朝十時ごろでしたし、私も好きなコーヒーでしたのに、そのコーヒー茶碗を手にとって、口までもっていきながら、ついに飲むことができなかった覚えがございます。

それまでよくお人から「あなたはお父様を殺した人たちを恨んでませんか」と聞かれて、「いいえ、あれはあれで済んだことです」

とお答えしておりましたその自分がいま現に自分の父を殺した側の人と一杯のコーヒーが飲めなかった。それは私にとっては一つの大きなショックでございました。敵を愛するという宗教に入れていただいていながら、そして人様にはきれいに恨んでいませんと申し上げながら、その人と飲み物が一杯飲めなかった。ようようの思いで録面撮りを終えて、食事も断って修道院へ戻りましたけれども、そのときにしみじみ思ったのは、敵を愛するということは本当に難しいということです。そして自分をやがて裏切るユダ、その人と食卓をともにして、その人にパンをお与えになったキリストはやはり神だったということを私はしみじみ思ったことがございます。

ですから、マイナス要素しかないものを愛するということは本当に難しいことです。にもかかわらず、私たちの目標は、そのような人もご大切に思うことだと思えます。私はコーヒーを飲めませんでしたし、手も握れませんでしたし、いまでもできるだけ離れていたいと思えます。しかしながら、その方も幸せに老後を過ごしてほしい。その人も大切な一人のかげがえのない人なんだと、そう思っ

て祈ること、それが私にできるぎりぎりのことだろうと思えます。学生たちに、まず当たり前を愛せるようにならなさい。当たり前を当たり前ととらないで感謝してとれる人になったら、もう一步進んで自分にとって嫌なこと、苦しいこと、それにもきつと何か意味がある。それをあなたの方の栄養剤として育っていきなさい。人間というものは苦しみを栄養にして成長するんだから、そして苦しみを愛することができたら、もう怖いものはなくなるといこうとを申しますけれども、やはりまだ若い人たちの中には、そのことがい

まは受け入れられないことも多いようでございます。

そして中には損をしてまで、愛する必要はない。つまりだからも顧みられない、価値なきかのものを愛することは損だ、だれが見てもすてきなものを愛していきたい。そういう言葉を出す学生たち、ジェラル・シャンドリーという人の言葉だったと思いますけれども、「一生の終わりに残るものは我々が集めたものではなくて、我々が与えたものなんだ」という言葉を伝えることにしております。本当にそう思います。一生の終わりに、確かに外国旅行して集めたもの、大枚をはたいて買い込んだものが残ります。しかしながら、だれのために残るかと言えば、生きている人のためにしか残らない。そして私についていくものは、私が一生の間に与えたものでしかないのではないか。

京都大学に河合隼雄先生という方がいらつしやるように伺っております。この方がお書きになった『日本人とアイデンティティ』または『宗教と科学の接点』、そういう本を最近、読みましたが、河合さんがいま人間は抑圧するものが変わってきた。かつては性欲とか名誉欲、権力への欲、そういうものを人は抑圧してきたけれども、いまや人間はたましいを抑圧しているのではないだろうかということを書いていらつしやいます。そして「たましい」とは何かという問いに対して、これは非常に定義のしにくいものだけれども、ジェームス・ヒルマンの定義を借りて言うのであれば、それは「死んだときに人が持つていくものだ」というのです。河合さんが言おうとしていらつしやることの中に、日本という国はかつてベリイが黒船を率いて来たときに、第一の開国を迫られた。しかしながら、いまや

日本は第二の開国を迫られているのではないだろうか。その当時のいわゆるハイテクを駆使した黒船、それに迫られて嫌々開いた日本の国は、それから百年余りたつて、いまや世界で有数のハイテクの国になり、エコノミックアニマルと呼ばれるほどに経済的な繁栄をしているけれども、この日本の繁栄というものは実は第二の鎖国をしているからだ。たましいの世界というものに日本人は目を閉ざして、ひたすら財力を追い、権力を追い、たましいを傷つけてまで金もうけをしてこまできたのではないだろうか。いま日本にもう一つの開国が迫られていて、それはたましいの世界に対してではないだろうか、ということを書いていらしたと思います。

私の理解は決して深いものでないので、表面的な理解しかしてないかもしれませんが、私は学生たちにやはりこのたましいの存在に目覚めてほしいのです。それは言葉をかえて言えば、人間だけが持つ、本能的でない、人格的な愛の座ではないだろうかということを一緒にいま考えております。

人間の尊厳ということが随分叫ばれておりますけれども、一方で生命科学の発達がこの人間の尊厳というものを揺るがし始めております。創世記が無意味になりかねない。つまり神が直接人間をおつくりになった、人間だけは特別だ、そして人間は、すべての地をうもの、水を泳ぐもの、空を飛ぶものを治める権利をいただいたということが、いま分子生物学の発達の結果、揺らぎ始めているのではないかと思います。DNAと呼ばれるものがすべての生命の最も基本的な構造として、アメーバから人間に至るまですべての生物に見出された事実の前に、私たちはもっと別の見地から人間の尊さ

というものに近づいていかないといけないのではないのでしょうか。

クオリティ・オブ・ライフという言葉をお聞きになったことがあるかと思いますが、いま特にアメリカで、このクオリティ・オブ・ライフということが問われております。ライフという言葉には生活という意味と生命という意味の二つがございまして、生活の質を高めることに人々の異存はございません。たとえば汚濁した空気をきれいにする。自然破壊をやめる。生活環境をよくして生活水準を上げる。これはみんなもう手を挙げて賛成するわけですが、生命の質を高めるということになりそこに遺伝子工学が入ってまいりますと、私たちはよほど気をつけないと、いわゆる弱肉強食の時代の出現ということも予期せざるを得なくなるように思います。

なぜ人間は尊いのか。これを学生たちと一緒に授業で考えるときに、私は人間というものは肉体と精神をあわせて持っている、その点に尊さというものがあるのでないだろうか。あわせ持っているがゆえに、時にはそれこそけだものにも劣るような残酷なことも人間はできる。しかしながら同時に現在ならマザーテレサ、過去にシュバイツァー、そういう人のような聖者にも等しい、神にも近い素晴らしい生活を送ることができるんだ。そしていま、私たちの知能がどれだけ高いか、低い。私たちにどれだけできるか、できないか。いわゆる人間の利用価値的なもので人々が生命の質を論じようとしているとしたら、私たちはこの精神の機能についてのみ考えていることになるわけです。その場合、精神の働きが精薄の人は低いから生きている価値がないとか、重度身体障害者は何もできないから生きている価値がないとか、そういう論がまかり

通ります。そこで、私たちはそれに惑わされてはいけません。いだろうか。精神の機能の度合いというものに尊厳があるのではなくて、精神をあわせ持っている人間そのものに尊厳を認めていくこと。だからどれほどほけてしまった人でも、ある意味で犬や馬ほどの知能も持っていない精薄の人にも、私たちは人間の尊厳ということをも認めていかないといけないのではないかというようなことをすることがございます。

これもまだ道遠しの感が十分にございますけれども、人間として生まれたからには肉体とともに、目に見えない魂がある。レントゲンにかかっても写らない愛があると言ふことは、はっきりさせたいのです。私たちが心に激しい愛を抱いているとします。そのさなかでレントゲンにかかったとしても、愛は写りません。激しい愛を持って生きている人が手術をして胸を開いたとしても、その愛は出てきません。一生の間、本当に激しい愛の生活を送った人が死んで解剖に渡されて、それこそ神経の隅々まで開かれたとしても、その一生の間、その人を生かし、その人の歴史をつくった愛はメスに触れません。では、なかったかと言ふと、ありました。だから、あの千二百度の高熱で焼き場では焼けないんだと思います。もしレントゲンに写っていたら焼けます。手術をしたときに出てきていたら焼けていると思います。しかしながら、目に見えない、その大切な愛、またはその愛の座としての魂、それは死よりも強いものであり、不滅であって、その愛を私たちは学生たちの中に育てていきたいと思います。

何を愛して生きるかということが問われると思うんです。いまこ

こには中・高の先生方もおいでになると伺いましたけれども、私たちが教育というものを通して子供たちの中に何を育てていきたいかといえ、決して共通一次でいい点を取るといふことを目的にしているのではないと思います。もちろんそれも非常に重要な要素ですし、いまそうなっていました。しかしながら、共通一次でいい点を取るといふことはミッショナルスクールでなくてもできます。むしろミッショナルでないほうができるかもしれません。私たちに任せられた教育というのは人格の教育でございます。

しかも正しく判断することができる人、正しく価値判断のできる人を育てること、換言すれば何を善と見ることができると人を育てることが大切です。人は本当に不思議なことですけれども、善しか選びません。私はこの言葉を初め聞いたときに、それこそウソと言いたくなりました。なぜならば、悪を選んでいる人がたくさんいるからです。保険金の殺人にしても誘拐にしても嘘にしても、すべて悪を選んでます。しかしながら、よく考えてみると、そのときその人に保険金をかけて相手を殺すことは善と映っていた。または子供をロッカーに押し込めて置き去りにする母親、それはその母親にとって一生足手まといになる子供を連れて生きるよりは、もう一度自由な身になって自分の人生をやり直すことのほうがベターに映ったわけですから、確かに私たちはいつも善を選んでます。決して悪を選ばない。したがって、教育というものはどんなときにも、刹那的な善を選ぶのではなくて、恒久的な善が選べる人になるように、本能的な善でなくて、理性的な善が選べる人になるように、利己的な善より、社会的な善がえらべるように、そしてミッショナルの大学、

中学、高校というのは、それこそ永遠の光に照らして何が善かということを教える場です。その価値基準を授業を通して、または私たちとの出会いを通して子供たちに、学生たちに伝えていくこと、それが私たちのキリスト教的な教育ではないかと思えます。

本当に土壇場に立たされたとき心は乱れます。私は女子学生をお預かりしておりますが、去年の夏も、夏休みの前に一人中絶を考えている学生が相談に来てくれました。とめましたけれども、やはりその子にとっては中絶のほうが善だったようです。そして中絶しました。戻ってきてから、まだ同じ男の子とつき合っています。私はやめてほしいと言ったのですけれども、その子が自分で善だと思っている限り、そのつき合いをやめないだろうと思います。

教育界にはさまざまな問題がございます。子供たち一人一人を見ていると、なぜそれがあなたにとって善なのと聞きたくなることがあります。しかしながら、その子には善と映っている。万引きをすることも、うそをつくことも、カンニングをすることも、中には売春をすることが善に映っている。そしてそういう善をもっとその子の真の幸せに導く善に置きかえることができるようにと本当に祈るような気持で授業をし、子供たちと出会っている毎日でございます。

本当につたない経験の中で、「教育を支えるもの」という題にどれほどかわかっていったかわかりませんが、一人格として育てていくこと、そして判断するときに、選択するときに、自由というものを、愛というものをこのキリスト教の価値観に基づいて選ばせていきたい。そんな気持ちを持っていることをお話しさせていた

できました。ご清聴いただきましてありがとうございます。

(ノートルダム清心女子大学学長)
本稿は、一九八七年一月二十四日、同志社キリスト教教育委員会主催の第十二回同志社教職員研修会における講演を収録掲載したものである。

渡邊和子氏の略歴

一九二七（昭和二）年旭川市に生誕。一九五一（昭和二十六）年聖心女子大学卒業、一九五四（昭和二十九）年上智大学大学院卒業（西洋文化研究科修士）一九五六（昭和三十）年ノートルダム修道会入会、一九六二（昭和三十七）年米国ボストンカレッジ大学院卒業・哲学博士Ph.D.「日本における道德教育と親孝行の概念」一九六三（昭和三十八）年十月から岡山にあるノートルダム清心女子大学学長。

一九七四（昭和四九）年、昭和四十八年度岡山県文化賞受賞、一九七九（昭和五四）年、第三十七回山陽新聞社賞受賞、岡山県社会福祉協議会より済世賞受賞、一九八六（昭和六十一）年、ソロブチミスト日本財団より千嘉世子賞受賞。

主な著書

「人をそだてる」（中央出版社）昭和四十五年九月

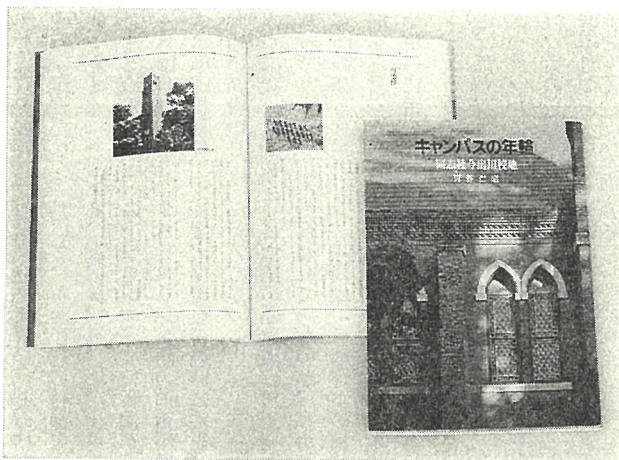
「美しい人に」——愛はほえみから——昭和四十八年十二月

「信じる『愛』を持っていますか」——出会い、夢、そして憧れ——昭和五十六年十二月

「愛をつかむ」——心に美しい花を育てる人に——昭和五十九年十二月
「心に愛がなければ」——ほんとうの哀しみを知る人に——昭和六十一年十二月

（以上PHP研究所）

同氏は、昭和十一年の二・二六事件に遭難された教育総監渡邊錠太郎氏の次女にあたる。



『キャンパスの年輪』

—同志社今出川校地—

今出川校地の110年の歴史を、多数の美しい写真を用いて、目に見えるように描いた軽妙なタッチの同志社史。

著者・河野仁昭 写真・秋山真邦ほか同志社大学出版部刊。B5判、194ページ。定価1500円。

取扱いは同志社収益事業課、電話(075)251-3037、3038